

顕現後第6主日

「日ノ下のすべては空の空」

伝道者の書1：1-14

ローマ8：18-25

(1)

次週から受難節を迎えます。今朝の礼拝から、その心備えをしておきたいと思えます。

「ダヤ教の教師」が「伝道者の書」は、60歳まで読んでほならないと注意しました。それで、しばしばその正典性が疑われ、旧約聖書39巻の聖典に入れるべきか否か議論的となりました。

「空の空、伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう」(1：2-3)、「読むほど、空しい風が、ビュウ、ビュウと吹き荒れている感じがします。「平家物語」の冒頭にも空しい響きを感じます。」祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらはす。驕れる者久しからず、ただ春の夜の夢の如し、猛き人もついには滅びぬ、ひとへに『風の前の塵に同じ』。

「伝道者の書」を愛読している日本のキリスト者が多いといえます。

「伝道者の書」のキー・ワードは、明らかに「空」です。ヘブル語の「ヘベル」は、旧約聖書に81回出てきます。その内58回は「伝道者の書」です。

「ヘベル」は、「息」・「氣息」・「蒸気」と幅広く訳せます。ラテン語の「ニヒル」は、「なにもない」と似ています。英語聖書は、「無意味」、中国語は、「虚空」とありました。

イザヤ書2章2節に、「あなたがたは鼻から息の出入りする人、たよることをやめよ、このような者はなんの価値があろうか」とのみ言葉があります。

「鼻から息が入りしている」といえば、マイナス20度になる極寒の地では、人も動物も口から吐き出す白い息が、あたり一面に、モウモウと立ちこめます。まさしく、人も動物も「鼻から息をするもの」であることを実感します。詩篇144編の4節には、「人はただ息に似て、その日々は過ぎ去る影のようです。」ともあります。また、ヨブ記7章16節には、主人公のヨブが「私はいのちをいといません。私はいつまでも生きたくありません。私にかまわないでください。私の日々はむなしなもの

す。「(息に過ぎない)」と言っています。生きていく人間のものが、「空」と言っています。

「へベル」を「そよ風」に当てはめると「そよ風、そよ風、全てはそよ風」に過ぎない、いかに世の富・快楽・成功・名誉など、全てを手にしても、そのすべては頬をさっと撫でて過ぎ行く「BREEZE」・「そよ風」に過ぎないとなります。

18世紀の哲学者「パスカル」は、「パンセ」の中で、「この世がいかにむなしいか分からない人は、まさしく、その人自身がむなし存在なのです。人間が他の被造物と根本的に異なっているのは、自分のむなしさを、よく知っているかどうかにあります」と言っています。

あるアメリカの統計ですが、「虚しい金持ちと元気な貧乏人とどちらをあなたは選びますか」とのアンケートをとりました。すると、大半は虚しい金持ちがいいと言う結果が出ました。もう一つ別の問いで、自転車に乗って楽しく歌を歌っているのと、高級車リムジンの中で泣きべそをかいているのと、どっちがいいですかというアンケ

ートには、リムジンがいいと答えただ人が、圧倒的に多かったと言います。

人間はなかなか、伝道者のいう「空」の意味を理解しようとしません。

以前、ロッキード事件の検事総長であった「伊藤永樹」さんは、「人は死ねば「シミになる」というショッキングな伊藤流「伝道者の書」を世に出しました。朝に萌え出て、夕べに枯れる草花の如き、はかない存在であると自覚したようです。人がどうしても直視出来ないものが二つあるといいます。「太陽と死」だそうです。ドイツの「ハイデッカー」という人は、さらにスゴイことを口にします。「人は生まれた時から死に向かって歩み始めている」といいます。確かにそうだと思いますが、それにしても何だと思えますが、それにしてしまうと冷めた見方であろうかと思われまます。多くの人は、そこまで突き詰めて考えません。日常の忙しさにかまけて、死に向かって歩んでいるとは考えません。まともに考えていたら日常の生活が成り立ちません。しかし、どんなに考えないようにしていても、いずれ、自らの死と向かい合う厳粛な時を迎

えます。

(2)

牧師として、たびたび火葬場に足を運びます。火葬場ほど空しさを覚える所はありません。遺族は、愛するものが召されて悲しみの中にありましても、葬儀の段取りを整え、弔問にこられる方々と挨拶を交わしながら、あわただしく時を過ごします。悲しんでいるいとまはありません。しかし、葬儀がすめば火葬場に赴きます。人は年代順に亡くなるわけではありません。不幸にして人生半ばに亡くなる方もいます。やがて、火葬場の扉が厳かに閉められ、点火されますと、しばらくして「ウウウウと唸りが唸り始めます。立ち尽くすものは恐れを感じます。そうした時、牧師のわたしは、その場において、詩篇23編を読み上げます。」死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませぬ。あなたがわたしと共におられるからです。「火葬場で、これを読むたびに、何と慰めに満ちたみ言葉かと思えます。全ては、「風」のように過ぎ去るのです。全ては「空しい」、全ては「無意味」と思われる時、「すべては空しくないのだ」と吹き払ってくださる

お方は、ほかでもありません、陰府に下り三日目に甦られたキリストです。私たちは、このお方を信じているのです。

(3)

M・ルターは、意外にも「伝道者の書」を、「慰めの書」と解説しています。「神から惜しみなく贈られた全てを感謝の心をもって受け取るべきことをこの書は教えている」と言います。

「伝道者の書」は、「空の空」で始まるのですが、最後の12章1節を見ますと、「あなたの若い日に、あなたの創造主を覚えよ。わざわざいの日が来ないうちに、『何の喜びもない』という年月が近づく前に」との前置きがあります。そして、「結局のところ・・・、神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとって全てである」で結ばれています。

4世紀のアウグスティヌスは、「告白」の中で、「汝(神)は、我々を神に向けて造りたまひ、我々の心は神の中に休らぐまでは安んじえない」との言葉を残しています。わたしたちの心が、その魂が、結局のところ、創造者のもとに帰らない限り、たとえ、何をしても、

いかなるものを手に入れようとも、結局は、喜びの果てに憂い來たるとの思いに捕らわれ、すべては「空の空」であるという空しい歌を歌い続けていることに変わりありません。これは、使徒パウロによれば、「それは、被造物が虚無に服した」(ローマ8:20)ことにあると指摘しております。

ローマ帝国は、当時「パックス・ローマナ」と権勢を誇っていました。ところが、4世紀頃には、滅びの兆しが見えはじめていました。そうしたなかでも、人々は、日々の豪華なグルメと、娯樂に興じていたようです。長生き・物の豊かさ・日々の平和と安定した生活という保障はあっても、まさにそうした時、ローマ社会は、それ自体、その内部からすでに枯渇し始めていました。そのことに気づいていた「聖グレゴリウス」のような人物もいました。

良く目を見開き、見つめ直すならば、人間のその心は、その魂は、この世界に安住の場を持ち得ないのです。それは、例えて言えば、今まさに、巨人が近づき、蟻の巣を踏みつぶそうとしているにもかかわらず、蟻は少しもそれに気づ

かないで、日々忙しく働き回っているー、そうした蟻の生き方をしている人が、残念ながら存在しています。いえ、ただ存在しているだけでなく、多く存在しているのです。

(4)

宗教改革者・カルヴァンは、青年のための「ジュネーブ信仰問答」を残しました。問いの第一は、「人生の目的とはなんですか」で始まります。答え、「神を知ることにあります」、「では、人生の最上の幸福は何ですか」、「それも同じです」。さらに、「なぜ、それを最上の幸福と仰いますか」、「答え、「これを欠くなら、人間は野獣より不幸となるからであります」という告白に導きます。年端も行かない青少年に向かい、「神を知らぬ人間は野獣より不幸である」とは、何という告白をさせるのかと思われず。

しかし、どんな知識を得ても、造り主を知ることが、人間として、もっとも大切なことであり、そこにこそ、計り知れない無常の幸せがあると教えたのであります。もしかしたら、「これは」伝道者の書の結論からヒントを得たのかもし

れません。

作家の「田中澄江」さんが、朝日新聞の「心の欄」に「神を知るために」という証を掲載したことがあります。田中さんは23歳の時に、宣教師からキリスト教の教理を学ぶ機会がありました。田中さんは、幼いときから、「人は何故この世に生まれてきたのか」という疑問を心にいだいていたようです。それで宣教師に「何故、人はこの世に生まれてきたのですか」と尋ねたのです。すると、その宣教師は「神さまを知るためです」と単純に答えました。そう言った方も言った方ですが、それをまともを受け止めた田中さんも凄くと思います。

人は、何故この世に生まれてきたのか、このためか、あのためかと、アレコレと考えます。しかし、考えてみたところで分かるものではありません。ところが、「人間が生まれたのは、神を知るためです」と言われた瞬間、田中さんは、それまでモヤモヤと思われていた全てが吹き払われたといえます。そうだ、そうに違いないと分かります。うれしくて、うれしくて、次々と涙が湧きあふれて、

抑えがたかったと言うのです。創造主を知るといことは、この世のいかなることを知ることにもなる無常の喜びなのです。朝起きて、周東の周辺の山々を見上げながら、「輝く日を仰ぐとき、月星がむる時、雷鳴り渡る時、まことの御神を思う、わが魂、いざただたえよ、大いなる御神を・・・」との讚美が思わず口を次いで出てくるわがみの幸いを覚えます。

岩徳線の駅前に、停車しているタクシーを見ますと、どことなく空しさを感じます。客を乗せていないタクシーが市中を走っているのも、どことなく空しさを感じます。しかし、お客さんを乗せて走っているタクシーは生き生きとした感じがします。思い返せば、わたしは、空しく走り回っていたタクシーのようではなかったかと思われまます。ところが、二十歳の頃、後部座席に客人として乗り込んでくれたお方がおりました。振り返れば、何とイエス・キリストではありませんか。その時から、空しく走り回る人生から解放されました。

「伝道者の書」には、「日の下で」との言葉が繰り返して出てきます。

「日の下に新しきものなし」・「天の下に何の益することがあるうか」(3:6)。

日の下のいかなる富も、成功も、出世も、栄達も、豊かさも、そのすべては空の空である。そうと知れば、「神よ、わたしをお守りください。わたしはあなたに寄り頼みます。「あなたはわたしの主、あなたのほかにわたしの幸いはない」との告白に導かれねばなりません。仮に・・・です、創造主を知ることなく、その生涯を終えたとしたら、「コハシトは言います。「なんとこの空、なんとこの空、全ては空」。創世記2章7節には、「主なる神は土のちりて人を造り、命の息をその鼻に吹き入れた」とあります。人は地の塵に過ぎません。そんなのです。しかし、人間の弱みに付け込んで信仰にいざなおうというさもしい下心は、「伝道者の書」のどこにもありません。本来、「空の空」・「無の無」に過ぎない私たちが、有の有たらしめられたのは、他ならないイエス・キリストを主と告白したからではないでしょうか。

ハイデルベルグ問1は、「生きるも死ぬにも、あなたのただ一つの慰

めは何ですか」。

答「私が私自身のものではなく、身も魂も、生きるにも死ぬにも、私の真実な救い主イエス・キリストのものであることです。この方は御自分の尊い血をもって、私のすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力から私を解き放ってくださいました。また、天にいますわたしの父の御旨でなければ、髪の毛一本も頭から落ちることができないほどに、私を守ってくださいます。実に万事が私の益となるように働くのです。そうしてまた、御自身の聖霊によって私に永遠の命を保証し、今から後この方のために生きることを心から喜ぶように、またそれにふさわしいように整えてもくださるのです」。

空の空である私たちを、有の有としてくださいましたお方、イエス・キリストの御名を誉めたたえます。
【祈ります】父なる神さま、

私たちを、地の塵で造り、命の息を鼻に吹き入れて下さったことを感謝します。いまこうして生き・動き・存在していますことを感謝します。主イエス・キリストの名により祈ります。「アーメン」